

五右衛門淵

むかしむかし、高野に五右衛門という名の者がおりました。からだはたくましく力持ちで、村人たちは彼に「鬼五右衛門」とあだ名をつけて、その並外れた力に驚いていました。五右衛門は秋田の金持ちに雇われて、昼前には秋田に向かって仕事をして帰ってきて、昼間から六百刈りの田畑を一人で耕すなど、とても働き者であったそうです。

ある日、五右衛門は神宮寺岳の麓で昼寝をしていました。その間に、山の谷から大蛇が現れ、五右衛門の身をぐるぐると巻き付きました。そして、足元から徐々に体の上へと巻き上がり、舌を伸ばして彼の顔を舐めまわしました。

五右衛門は不意に目を覚まし、大蛇に絡まれていることに気がきました。並みの者ならば驚き叫ぶでしょうが、五右衛門はまったく動じず、叫び声を上げるようなことはしませんでした。そして、腰に差していた胴乱からタバコのヤニを取り出し、大蛇の口の中に押し込みました。すると、大蛇は次第に力を失い、巻きついていた身をほどき、山の谷にヌルリと逃げ去って

「堀井徳五郎の昔ばなし」から
イラスト／佐々木あびす [大仙市在住]

いきました。五右衛門は大蛇に打ち勝ったのでした。しばらく経ったある日、榑岡に大雨が降りました。川が増水し、川上からいろいろな木々が流されてきます。五右衛門は鳶口を下げて、橋の上で流れてくる木を捕らえようとしていました。すると、上流からとても立派な大きな木が勢いよく流れてきました。五右衛門は鳶口を突き立てようとしていましたが、川の流れが激しく、なかなか木に届きません。そのため、五右衛門は川に飛び込み、水しぶきを上げてその大木に向かって泳いで行き、岸まで引っ張ってこようと試みました。しかし、木に跨ると同時に、それはぐるりと回転し、五右衛門はあっという間に水に飲みこまれてしまいました。その様子を見た者は、その大木の下半分にまるで蛇腹のような模様が見えた、と語りました。

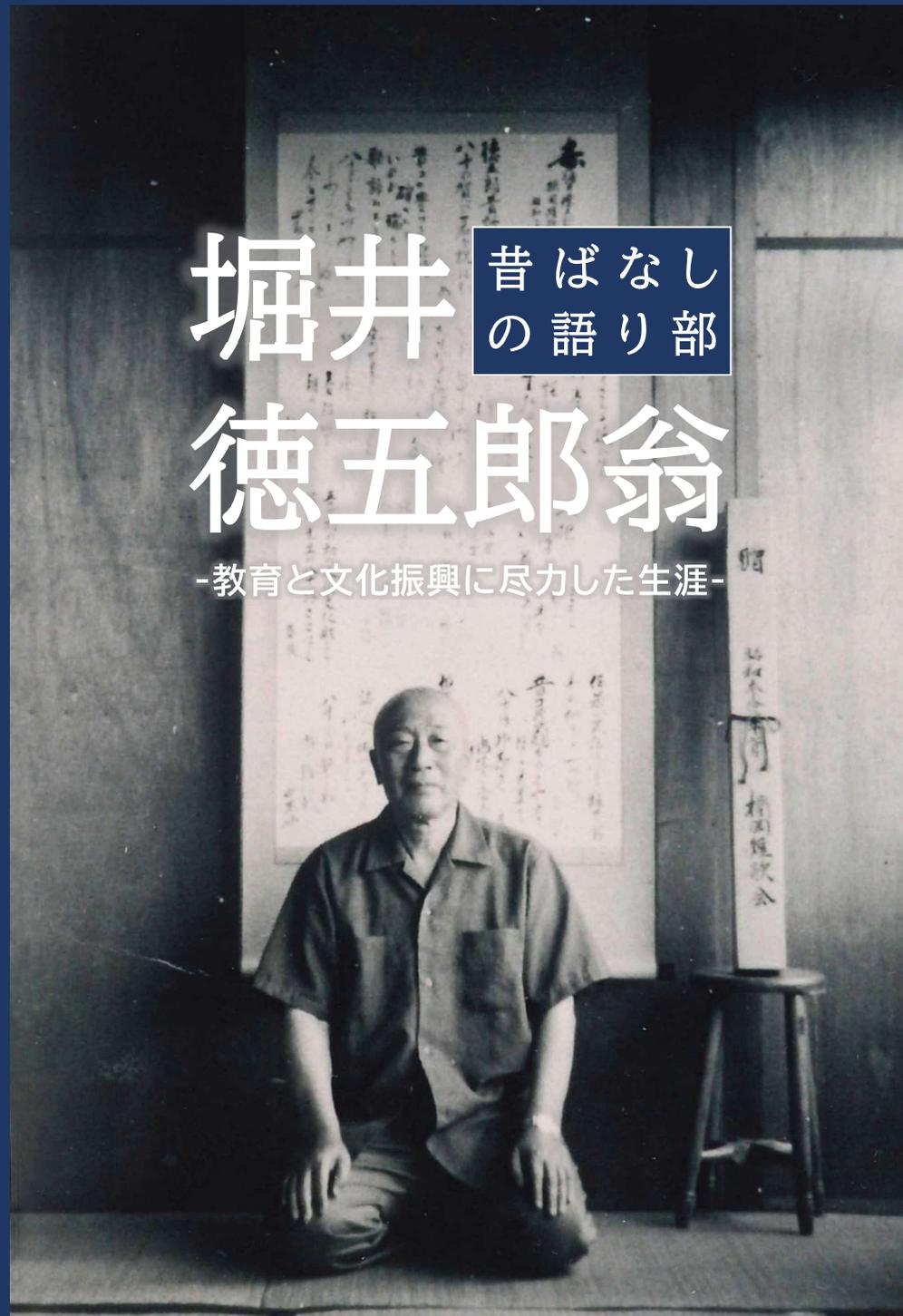
そのようなことがあって、神宮寺岳の大蛇の仲間が仇を討ったのだらうと噂する人もいました。橋の下には今も深い所が残り、いつからか「五右衛門淵」と呼ばれるようになりました。それは五右衛門の命がその場所で尽き果てたからなのです。

【注目！】スマートフォンを使ってイラスト右上のQRコードを読み取ると、堀井徳五郎による昔話の肉声を聴くことができます。

堀井 徳五郎翁

昔ばなし
の語り部

-教育と文化振興に尽力した生涯-



日本の絵本で歴代発行部数1位を誇る「いないいないばあ」の作者として知られる児童文学作家、松谷みよ子。彼女の数ある作品の中に、「やまんばのにしき」というお話があります。このお話は絵本になって全国の書店で販売されたほか、かつては小学校の教科書でも取り上げられたため、多くの子どもたちに広く知られていました。この「やまんばのにしき」は、旧南外村南檜岡地区出身で、昔語り名人として知られた堀井徳五郎(1885-1974)が語った昔ばなし「長福山の山姥」(ちょうふくぎんのやまんば)に着想を得てつくられたといわれています。



堀井徳五郎

南外村の「昔ばなし伝承者」

「昔ばなしの伝承者」として見いだされる

徳五郎は1885(明治18)年、現在の大仙市南外地域高野集落生まれ。戦前・戦中にかけて国内だけでなく、中国でも教員としての職務に尽力しました。1947(昭和22)年、64歳で帰郷。私塾「子供向上学院」を開設して地元の子どもたちに学びの場を提供するなど、郷里の教育振興に力を注ぎました。

70代半ばになった徳五郎は、一部の専門家から注目されるようになりました。きっかけは、旧南外村が地域の伝統文化の記録保存のために実施した、村の伝説や演芸、民謡、昔ばなしの調査に協力したことです。徳五郎自身が「子どもの頃に祖母や学校のごづかいさん(用務員)から聞いた」とする昔ばなしの中から約30編をまとめて簡単な解説を加えた資料を県教育委員会に送ったところ、秋田大学教授で日本史学者の今村義孝教授の目に留まりました。

今村教授は夫人の泰子さんとともに南外村を訪

問して実地調査を実施。徳五郎の昔ばなしを実際に聞いたところ、記憶している昔ばなしの数が多い上、それぞれのお話を方言のまま抑揚をもたせて独特のリズムで語る様子は本来の昔語りを忠実に再現していると、その価値を高く評価しました。今村夫妻は徳五郎から採話した約50の昔ばなしのうち30余りを、著書「秋田むかし第1集」(未来社)に収録しています。

村教委が県人間文化財指定を申請

旧南外村の教育委員会は「今の老人の昔ばなしを記録保存しておかないと、後世に伝わらない」と、秋田県教育委員会に秋田県人間文化財(無形文化財)への指定を申請しました。残念ながら認定を受けることはできませんでしたが、その後秋田魁新報に「徳五郎むかし話」と題して88回にわたって連載されたほか、テレビ番組でも取り上げられるなど、昔語り名人・堀井徳五郎の名前が着実に広まりました。

イラスト／『長福山の山姥』に登場するキャラクターたち 岡田智美[大仙市在住]

「長福山の山姥」が絵本化

徳五郎の昔ばなしで最も有名なのが「長福山の山姥」。徳五郎によって秋田の方言で語られたこの物語を基に、児童文学作家の松谷みよ子が幼い子どもにも理解できるような言葉づかいと表現に置き換え、作者自身の意匠を加えてつくられたのが絵本「やまんばのにしき」です。この作品は小学校3・4年生向けの教科書に掲載され、全国の子どもたちにとって身近な昔ばなしのひとつとなりました。

昔ばなしを後世に…昔語りを記録保存

徳五郎は82歳になってから、当時の役場や教育委員会の関係者、友人と相談し、「自分自身が記憶している昔ばなしは後世にのこすべきではないか」と考え、自らの昔語りの肉声をリールテープに収録することとしました。完成したテープは計11本で、約90話の昔ばなしが収められています。

このテープは現在、南外公民館で大切に保管されています。南外地域在住で元教員の伊藤寛雄さんは、リールテープの経年劣化で徳五郎の肉声記録が失われることを防ぐため、雑音除去を施した上で、音源のデジタル化を進めました。現在も徳五郎の声を当時のままに聴くことができます。

昔ばなしの伝承のほか、地域の文芸団体「檜岡短歌会」の発足にも関わるなど、長くにわたって地域の文化振興のために尽力された徳五郎。1974(昭和49)年に89歳で亡くなられました。没後半世紀が経過しますが、徳五郎がのこした昔ばなしは、昔語りのボランティアなどによって今なお語り継がれています。

編集・発行／大仙市役所南外支所地域活性化推進室

監修・協力／来栖史江【(一社)日本話しことば協会理事】
黒沢せいこ【日本むがしっこの会主宰】
倉田直美【大仙民話の会会長】※敬称略

昔語り名人 堀井徳五郎の足跡

1885(明治18年) [0歳]	大工・兼蔵の子として南外村梨木田に生まれる。
1907(明治40年) [22歳]	秋田師範学校卒業。以後、教員として南檜岡小学校訓導や峰吉川小学校長(協和)、高梨小学校主席(仙北)、南檜岡小学校長などを歴任。
1913(大正2年) [30歳]	関東都府庁へ出向。教員として鶴子高 ^{ひしか} 公学堂教諭、同小学校長、同公学堂長、旅順第二中学校教諭を歴任
1932(昭和7年) [49歳]	依願免官
1933(昭和8年) [50歳]	満州国教員講習所で中国語を研究、語学講習所講師を兼任
1935(昭和10年) [52歳]	蒙古へ出向
1938(昭和13年) [55歳]	関東軍属蒙古軍政府教育顧問として各地に勤務
1938(昭和13年) [55歳]～ 1945(昭和20年) [62歳]	大迪実業及び神明高等女学校に嘱託勤務
1947(昭和22年) [64歳]	郷里・南檜岡村に引き揚げ。このころ妻が病死。南檜岡農協の理事を1期務めたほか、中国語通訳一等、武徳会弓道三段に合格。「子供向上学院」を開設し、子どもたちに勉強を教える
1957(昭和32年) [74歳]	旧南外村の依頼を受けて、村の伝説や演芸、民謡、昔ばなしに関する調査に協力。自身が知る昔ばなしのうち約30話をまとめ、県に提出。翌年秋田大学の今村義孝教授と泰子夫人が村で現地調査を実施するきっかけとなる。
1959(昭和34年) [76歳]	「秋田むかし第1集」(今村義孝編・未来社刊)に堀井氏が寄せた32編の昔話が収録される。 南外村教育委員会が県教育委員会に「秋田昔話保持者」として徳五郎翁を県人間文化財(県無形文化財)に申請。秋田県文化財審議会で検討されるが保留となる。
1960(昭和35年) [77歳]	秋田魁新報に「徳五郎むかし話」を連載(1961[昭和36]年12月まで・全88回)。 NHK「希望を生きる」番組内で徳五郎翁が語る「ちょうふく山の山うば」について放送される。
1961(昭和36年) [78歳]	檜岡短歌会発足に参加。翌年寒流社に入会し、歌作に励む。雅号は「白果仙」。
1967(昭和42年) [84歳]	昔ばなしの記録保存のため昔語りをテープ収録。全11巻 児童文学作家の松谷みよ子が、徳五郎翁が語った「長福山の山姥」をモチーフにした絵本「やまんばのにしき」を出版
1971(昭和46年) [86歳]	松谷みよ子の「やまんばのにしき」が小学校の国語教科書の教材に採用される
1974(昭和49年) [89歳]	逝去